

もっと知ろうよ！オキナワ！

第15回 2017(平成29)年度 沖縄視察記

人権擁護委員会 沖縄問題対策部会 部会長 藤川 元 (35期)

1 毎年、沖縄視察をする理由

沖縄部会では、1995(平成7)年9月に沖縄で発生した、米兵による少女暴行事件を機に部会を再興するとともに1997(平成9)年以後毎年、沖縄視察を継続して行なっている。沖縄は本土から距離の上で遠い上、面積にして70%もの米軍基地が日本国土面積の0.6%しかない沖縄に集中している。日米安保条約が、本当に日本の安全のために必要であり、かつそれが合憲であると考えれば、米軍基地は日本全体で負担すべきものである。しかし、実際はそうはなっておらず、沖縄に過度な負担が押しつけられている。こうしたことから沖縄で生じる生命、身体、環境、財産などに関わる数々の人権侵害問題、差別感などにつき、東京にいるだけではわからないことを、沖縄に行き、現場を見、沖縄の人から直接話を聞くなどして生の沖縄の実態を知ること、これを東京をはじめとする本土の人に知ってもらうこと、このようにして沖縄と本土の差をなくすことに努めること、これが沖縄視察の目的である。

今回は、沖縄部会員を中心として9名の弁護士が参加して、2018(平成30)年1月19日から21日までの日程で行なわれた。

主な訪問先、目的は、19日が名護市役所(総務部基地対策係)、米軍キャンプシュワブ・ゲート前であり、新基地建設のための辺野古埋立の現状を知りその問題をさぐること、20日が糸数アブチラガマ、平和祈念資料館など沖縄本島南部の戦跡を巡り、第2次大戦末期の沖縄戦の状況を知ること、とした。これを終えたのち那覇市内へ行き、沖縄タイムス本社を訪ねた。また、21日は、午前中、対馬丸記念館、不屈館を訪問した。

2 名護市役所訪問

(1) 2016(平成28)年12月、最高裁は、辺野古埋立承認の取消をした翁長知事の処分を違法であると判断した。その判断に沿って翁長知事は、承認取消を取り消した。これによって、仲井眞・前知事の埋立承認が生きることになったため、国は、埋立工事を

再開した。しかし、再開したとはいっても、基地完成となるには、時間的にも、工事技術的にも、法的にも大きなハードルがあり、現時点では実際のところ工事はあまり進んでない状態である。

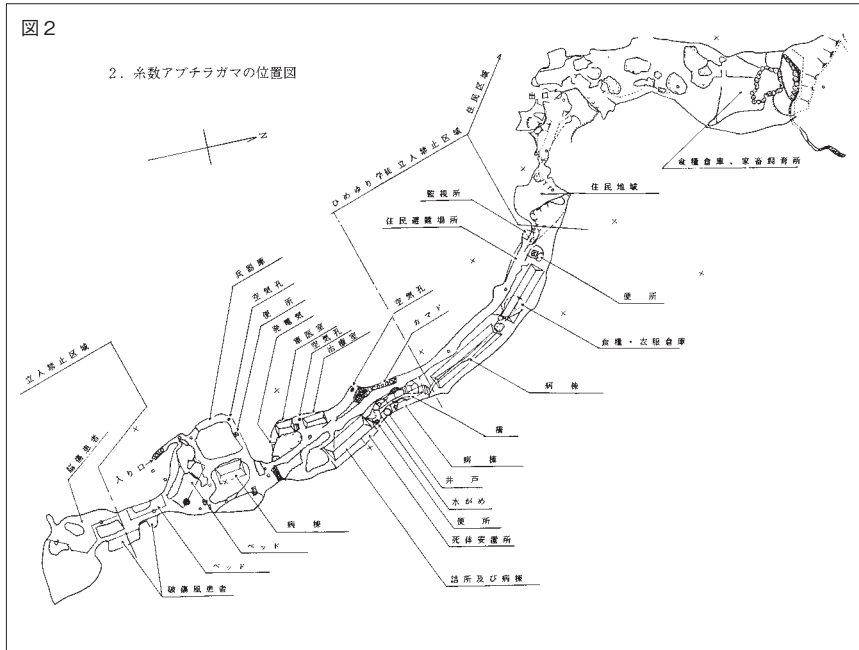
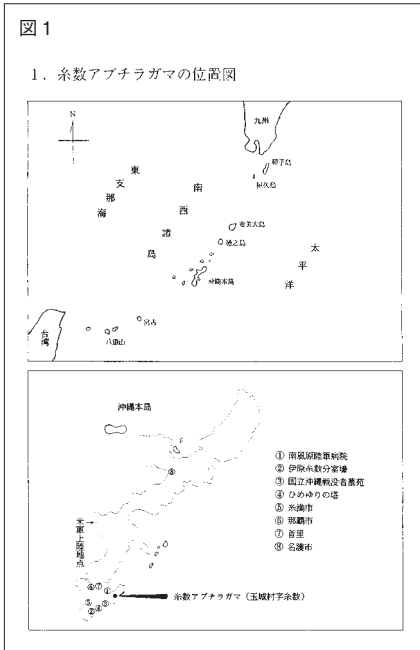
(2) 私たちは名護市を訪問し、基地対策係のかたからお話をうかがった。

① 埋立工事による自然環境の破壊について 埋立工事の対象とされている辺野古・大浦湾は、山、川、海が連動して独特の生態系をもち、サンゴ礁、ウミガメ、ジュゴンなどが生息していることに加え、河口付近のマングローブ林や周辺の山々を含む陸域の動植物により、絶妙なバランスの中で生物の多様性を維持しているといわれる。自然環境の保護については、基地建設に反対するために言い出しているのではなく、あくまで、この自然を守ることが大切だから名護市としても訴えているのだという。ところで、建設工事が再開された今、全体からみれば基地完成には程遠いとしても、貴重な自然は相当程度に破壊が進んでしまっている可能性があるとのことであった。

② 埋立工事を進めるためには、大浦湾へと流れ込む美謝川の流路を切り替えて河口の位置を変えなければならぬし、辺野古ダム周辺から埋立用土砂を運搬するために辺野古ダムの上にベルトコンベアを設置する必要がある。しかし、美謝川切り替えやベルトコンベア設置のためには条例に基づき名護市長との協議が必要となる。沖縄視察の直後に行なわれた名護市長選挙において、建設反対の立場を明確にしていた稲嶺進市長が敗れたため、現・名護市長がこの点をどう判断するのか、目が離せないところである。



写真1



3 糸数アブチラガマ

- (1) 糸数アブチラガマは、現在は、南城市^{たまぐすく}玉城字糸数の北側にある自然洞穴であり、地元では「アブチラガマ」と言っている。「アブ」とは深い縦の洞穴のことであり、「チラ」とは崖のことで、沖縄の方言で崖が縦に大きく落ち込んだ所、「ガマ」とは沖縄の方言で洞穴や窪みのことをいう。ちなみに、同じく洞穴であっても「ガマ」とは自然にできたものをいい、「壕」とは人間が掘ったものをいう。
- (2) 1945（昭和20）年4月1日、米軍は中部の西海岸から上陸した。そして、上陸1週間で沖縄本島の中、北部の主要部分を制圧した。これに対し、南部では、非戦闘員を巻き込んだ激戦となった。日本軍守備隊の中核をなす陸軍第32軍司令部は首里城の地下壕内におかれた。日本軍守備隊の1つの大きな使命は、沖縄にできるだけ長く米軍を引きつけておき、本土決戦の準備のための時間かせぎをすることにあった。水際作戦をとらず、あっさり米軍の上陸を許した日本軍は、首里司令部を中心に、約1ヶ月半にわたり、猛烈な反攻に出た。しかし、米軍の猛攻に屈し、5月27日に、南部の摩文仁方面へと撤退を始めた。
- (3) 上陸に先立ち、3月下旬より米軍による艦砲射撃が始まったため、糸数の住民約200名がアブチラガマに避難した。その後、アブチラガマは、南風原陸軍病院の分室とされ、軍医らとともに、ひめゆり学徒隊も応援に入った。ガマの中は、一部が住民の避難場所に、一部が病院とされた。病院内には重症の兵士が次々と運びこまれたが、満足な医療設備、薬な

どあるはずもなく、傷は悪化し、膿と蛆だらけとなり、脳症患者、破傷風患者が増え、麻酔もなく足の切断手術をするなど地獄絵そのものであったという。

- (4) 私たちは、もと学校の教師であった下地さんにガイドをお願いしつつ、アブチラガマに入った。ガマの内は、できるだけ元の状態を保つために観光用に改変されておらず、そのため、入るにあたっては一人一人が懐中電灯とヘルメットを借り、下地さんを先頭に、前の人と離れないように、また、足元は岩がむき出しであるため滑らないように、転ばないように注意しながら1歩1歩進んだ。そして、かつて病棟、軍医室、カマド、住民地域があった場所で時々立ち止まっては下地さんの説明を受けた。

ガマの中には井戸があり、また、かろうじて食料もあったという。しかし、米軍が迫る中、真暗な中で重症の兵士のうめき、悲鳴がひびき、悪臭がただよう中、もっぱら自分と身近な人の命を保つことだけを願って極端に緊張した日々を過ごしたのである。

- (5) 私たちは、戦争の怖ろしさ、おろかさ、特に武器が昔とは比較にならないほど向上した現代戦のそれを常に忘れてはならない。戦後70年以上が経過した今、戦争を直接体験した人が急速に減ってきているため、ともすると忘れがちになってしまうが、そのような時は、戦跡を訪れ、自らの想像力によって感じる必要があるのではなかろうか。

※図・写真に関する注
 図1、2は沖縄県南城市平成7年3月31日発行「糸数アブチラガマ—平和への願い新たに—」より引用し、イメージ図付写真1は、名護市発行のパンフレット「米軍基地のこと 辺野古移設のこと」より引用した。